

# わたしの出版人生

小山光夫

本稿は、小社の社員研修会（2020年2月21日、於：文京区立礪川地域活動センター）の講演のためのレジュメに大幅な加筆・訂正を加えていただいたものです。（編集部）

## はじめに

はじめに簡単な自己紹介をさせていただきます。私は大学を出て学術出版社の創文社に入社し、定年まで30数年勤めました。創文社は戦前に京都を拠点に展開した弘文堂から独立して創業しました。

入社から1年半ほど見習いをさせられました。実質的には丁稚奉公でした。掃除から始まり、本の出庫、新刊回り、取次への納品、返品再生業務から倉庫管理、版下や書籍の箱の整理、そして当時は奥付に検印を貼る仕事もありました。またお客の送迎から製本が遅れると神田にある製本所でグラシンがけや箱入れなどの作業をするといった具合で、編集以外の仕事はほぼ何でもこなしました。

このような事情は、その頃編集希望者は多くいますが、現業社員の採用が難しい状況だったためです。私のような東京生まれの東京育ちで土地勘もあり、車の運転など重宝がられる人材は、できれば現場で使いたいというのが経営者の本音でした。当時の社員はみな優秀でしたが、東京の人は少なく、さらに私が運動部系の身体と気質をもっていたこともあり、必要以上に期待感をもたせたようです。そのことは察知していましたので、当初1年という約束が延ばされて1年半ほど経ったため、編集で採用されたのに話が違う、このままなら辞めると社長に直談判して、編集部に強引に編入してもらったという事情です。このような些末なことに言及するのは、私の実人生を語るうえで大事な事柄であることと、その後の編集活動を振り返ると、この経験は出版業全般にわたる知識を与えてくれたと思われるからです。

創文社は法人格としての組織的な会社というより、オーナーの久保井理津男さんによる個人経営が実態でした。それ以後のサラリーマン人生は、この久保井社長との強い個人的な緊張関係の中で営まれました。雇用契約など制度的保障もなく、労働者の保護など機能しませんでした。そこで弱みを見せずに戦うのが私のスタンスになりました。社長の口癖は「やなら辞める」という言葉でした。わたしという出版人が今あるのはそのような磁場の中で鍛えられたことと、日本を代表する多くの優れた学者、著者との出会いが決定的な経験だと思います。

以上の話は戦前の社会ではよくあったことですが、世界的に大学紛争の嵐に見舞われ全共闘運動の影響を受けてきた学生の経験としては珍しいのではないかと思います。理想と現実との激しいギャップを目の当たりにして、いかに生きるべきか、いかに仕事をするかが

課題になりました。このことは言葉を変えると、学問的な知識や知恵を日常の場でどう生かすかということに他なりません。これは学生運動においても日常性が問題化した時代でしたし、わたしもヨーロッパに比べわが国のインテリ、知識人について、知性が身体化していない、日常化、社会化していないという印象をもっていたことが背景にあります。半世紀以上にわたるこのような問題意識が私の出版人としての原点ですし、また限界とも言えます。

ただ誤解して欲しくないのは、創文社の久保井社長を個人的に非難しているわけではありません。彼も埼玉の田舎から出てきて、東京にあった弘文堂印刷部に入り印刷技術を身につけました。働きながら大学を出て、戦後は弘文堂の社長を務め、さらに創文社を起業して、日本を代表する学術出版の経営者になりました。その人生は多くの苦難と筆舌に尽くしがたいものであったと思います。苦労話もよく聞かされました。その意味で出版人として尊敬すべき先輩であり、またその限界も分かっているつもりです。退職時には無言の中にも互いに戦ってきた者として感ずるところがあったと思います。

いま後期高齢者になり、いかに多くの人に支えられ、育てられてきたかをつくづく思います。

それでは長い紹介はここまでにし、私どもの出版社のお話を致しましょう。

お話は、「Ⅰ 知泉書館の創業（2001）から現在まで」、「Ⅱ 今後の方向と未来」、「Ⅲ 私の創文社時代（1969-2000）」、「Ⅳ 編集と出版の現状と今後」の4つに分けて進めさせていただきます。レジュメ風のまとめや叙述体など、まとまりのない形になってしまいましたが、どうぞご寛恕ください。

## I 知泉書館の創業（2001）から現在まで

### \* 創業時の事情

- ・若い人と三人で創業、二年後に一人退社して、二人で本格的に展開する。
- ・退職後に起業するつもりがなかったのに、原稿がまったくない状態での出発でした。
- ・他社の編集者たちから、100冊刊行できればやっていけるよと励まされ、それを目指して頑張りました。結果はそんな甘いものではありませんでした。400冊出した現在も事情はさして変わりません。

### \* 創業時の状況と編集方針

#### 《前提的状況》

- ・過去150年に及ぶヨーロッパ学の受容とその性格（ヨーロッパ中心主義、翻訳文化の重視、特に英独仏を中心とした語学の偏重）。そのことが国史と中国学に与えた各種の影響。
- ・高等教育および研究者養成機関でもある旧制帝国大学（7旧帝大）の使命、講座制の功罪。
- ・戦後に多くの私学や地方大学から人材が輩出し始め、学問環境の変化にいかに対応するか。

#### 《編集上の方針》

- ・英独仏の西欧主流の研究状況に対し、周辺の北欧、南欧、東欧に注目する。
- ・教父研究において西方教父を主流とした見方に対し東方教父に光を当てる。
- ・中世哲学を中心に聖書註解や説教集、書簡集の訳出をする。書簡集は古代や近世にとっても重要な史料となる。
- ・時代ごと、思想家中心の哲学研究に対して、古代哲学から中世、近世、現代哲学までオールラウンドに扱う。主題的なアプローチを重視する。
- ・哲学学々の脱皮と哲学の身体化。いわゆる等身大の哲学的営為とは何か。哲学の日常化の重視。日々の生活経験から概念を形成し、その概念に形式を与えて普遍化するという、一連の思考的営みを重視すること。特にわが国の情緒主義的、全体主義的な行

動特性を考える時、論理的な思考力と判断の構成能力の涵養が期待される。

- ・わが国では学術言語は、伝統的な学問との対抗上、2語を中心とした訳語として展開した(有と存在など)。ヨーロッパでは経験を基盤として日常言語から概念が形成されてきたのに比べ、これは決定的な違いである。この言語的な二元構造の克服が、結果的に哲学、学問の個人化、社会化に深く関わる事態であると言える。学術言語とやまと言葉との融合が、学術的言説にとっての可能性を開くものとなる。
- ・イエズス会と近代という位相でアジア、日本、南米への進出と文化的干渉に注目し、近代化と教育の普及への貢献を考える。「イエズス会学事規則」(日本の近代公教育とミッションの役割:カトリックとプロテスタントの学校群)
- ・教養の重視。ヨーロッパの古代以来の伝統、三学四科(文法、修辞学、論理学と算数、幾何、天文学、音楽)を踏まえて、学問と教養が形成されてきたことに注目、わが国の教養、われわれにとっての教養を考える。
- ・自動化・ロボット化が進み、賃労働が減衰していく時代に、情報科学とりわけAI技術の展開が、産業社会のみならず社会的にも基盤的な存在になると思われる。限りなく人間的な形式を学習しようとするAI技術にとって、人文・社会科学や芸術と数理科学との統一は避けられないことになる。
- ・ユーラシア大陸の再発見。わが国の学問的関心は西のヨーロッパと東の中国を中心に展開してきた。グローバル化に伴いそれらを結ぶユーラシア大陸に視点を置いて、読み直していくことが必要になってきた。この地域は文献が少なく、その歴史と実態が掴みづらかったが、昨今の考古学や宇宙考古学などによる歴史的発掘の展開で、鉄の製作や遊牧民の行動、多数の城郭都市の発見など多くの知見が明らかになりはじめた。ユーラシアの東西だけでなく南北など沈黙の世界に光があてられ、今後は新たな世界認識の扉が開かれると思われる。
- ・名誉教授群の可能性。人生100年と言われ大学を退職してから、数十年におよび健康を維持して研究し続ける学者が増えている。その成果は個人的業績であるにとどまらず社会的資源としても貴重なものである。その果実を出版界としてどう受け止め後世に残していくのか、われわれにとっても大きな課題である。

## \* 出版活動

- ・原稿のない状態で、著者の持っている印刷物をデータ化することから原稿作成をするケースが多かった。
- ・主要な著作集類  
〈エックハルト ラテン語著作集〉(全5巻)、〈オッカム「七巻本自由討論集」註解〉(全7巻中3巻分刊行)、〈デカルト全書簡集〉(全8巻)、〈ヘーゲル全集〉(全19巻、24冊、現在刊行中)、〈リーゼンフーバー小著作集〉(全5巻)、〈ヨハネ福音書註解〉(全3巻)、〈知泉学術叢書〉(既刊12冊)
- ・学会誌(『哲学』、『中世思想研究』、『西洋中世研究』、『実存思想論集』)
- ・作品紹介  
『ヨーロッパの人間像 神の像と人間の尊厳』金子晴勇著(創業して最初の刊行物です。原稿のあてもなく起業したのを見て、気の毒に思った著者が急遽まとめてくれたものです。先生には処女作以来半世紀に及び多くの書物を出させていただきました。私どもの恩人です。90歳を前に著作する姿に頭が下がります。感謝。)  
『中国思想史』A.チャン著(中国系フランス人の著者によるヨーロッパでは定評の概説書。多くの賞を受賞し注目を集めている。優れた通史が世界的にもない中、わが国の研究者、特に院生にとっては必読の一書。)  
『朝鮮儒学論集』高橋亨著(朝鮮思想史に初めて独自の形式を与えた著者による本格的論集。朝鮮思想研究者にとって高橋の敷いた道は、今日なお多くの影響を与えている。)  
『唐代の道教と天師道』小林正美著(半世紀以上にわたる道教研究の前提を否定し

た革新的研究。日本の学界は無視。中国で革命的学説として注目を浴びる。道教の諸派は単なる教程上の作品の意味であることを解明。)

『キリスト教と古典文化』C.N. コックレン著 (ギボンのローマ帝国衰亡史は啓蒙主義の視点からキリスト教を否定的に扱うが、本書はギボンが使用した史料や成果を活用、キリスト教の果たした役割を適切に扱い、ローマからキリスト教中世への転換を活写する。1939年刊行の古典的文献でアメリカの大学院での標準書。)

『アウグスティヌスと古代教養の終焉』H. I. マルー著 (ギリシアからローマへの転換期に、ギリシア語からラテン語を形成する困難な道筋を明らかにし、ギリシア文化からラテン文化への移転の事情を伝える古典的名著。日本の漢字やヨーロッパ語の導入と同様の困難が見られる。)

『ヨブ記註解』保井亮人訳 (トマスの聖書註解の初の翻訳。神学者トマスに迫る格好の書。中世哲学にとっても貴重書。)

『トマス・アキナス 人と著作』『トマス・アキナス 霊性の教師』J.-P. トレル著 (トマスに関する世界的に定評の概説書。トマス研究のみならず、中世に関心のある読者にとっては、中世思想の位置取りをする上でも基本文献。)

〈エックハルト ラテン語著作集〉中山正樹訳 (わが国のエックハルト研究は京都を中心にドイツ語説教を素材に研究されてきた。しかし中世の学問言語はラテン語であり、異端嫌疑で追及されたとはいえ、ドミニコ会を代表するエックハルトの思想を知るには元資料であるラテン語文献が基本である。わが国では全く無視されてきたラテン語文献を全訳した画期的な業績である。本著作集刊行後、ラテン語文献による研究論文が発表されはじめたが、本書に言及する研究者はほとんどない。わが国の学問のあり様を示す象徴的な事例であろうか。学問は真理を探究する場である。使用した文献は後学のためにも開示されることが好ましい。)

〈デカルト全書簡集 全8巻〉山田弘明他訳 (従来、デカルト書簡は戦前から多くの出版社で部分的に出されてきた。本企画は書簡のすべてを訳出した画期的な書簡集である。分量としては著作集と同規模のもので、デカルトの多様な姿が表現された貴重な資料となろう。)

『対話集』D. エラスムス著 (多くの庶民に支持されたロングセラー。特権階級を批判するとともに、庶民が正しく生きるための指南書として圧倒的な人気を博した。)

〈ヘーゲル全集〉(ヘーゲル関係の翻訳書や多くの文庫本は、岩波版全集をはじめ古い底本から訳出されたものがほとんどである。30年に及ぶ批判的校訂版の完成をまって、日本語版として最新の成果を織り込んだ本ヘーゲル全集は、今後はテキストの決定版としてヘーゲル像の革新を迫ることになる。)

『ヘーゲルハンドブック』W. イエシュケ著 (ヘーゲル全集の編集責任者であった著者が、批判的校訂版全集を全面的に活用して、ヘーゲル研究の最前線を体系的に紹介した、ヘーゲル研究者必携の基本文献。)

『存在から生成へ』山口一朗著 (後期フッサール研究の画期的業績。『論研』や志向性を中心とした前期中期の研究がわが国の主流の中で、時間意識や無意識の世界を展開する後期フッサールに光をあてる。)

『パイディア ギリシアにおける人間形成 上』W. イエーガー (教養と人格性の源泉を明らかにした、世界的に定評の本格的名著の翻訳。この本の刊行は50年前からの夢で、完結が待たれる。)

『キリスト教人間学』金子晴勇著 (ヨーロッパ思想の背骨であるキリスト教と人間観の歴史を見事に紹介した初の本格的通史。キリスト教概論、キリスト教史・文化論としても読める、大学院生の基本的教科書。)

『解釈学と批判 古典文献学の精髓』A. ベーク著 (19世紀の古典文献学を確立したベルリン大学教授でベルリン大学創設の主要メンバーであった著者が、〈認識されたものの認識〉という視点から、古典学における言語的モデルを歴史的モデルに転換した講義。村岡典嗣の日本思想史研究の方法論の基礎ともなった。)

〈リーゼンフーバー小著作集〉全5巻（著者はイエズス会のミッションとして日本に派遣されて半世紀、宣教活動とわが国の中世思想研究に多大な貢献をした。信仰に関わる文章を集約した本著作集は、ヨーロッパのキリスト教と思想に関わる広範な学識によってヨーロッパの最も良質な精神の形式を結晶化した。信徒のみならず一般読者にも強い感銘を与える作品であり、ヨーロッパ文化の理解にも優れた手引きとなる。）

『人文学概論』安酸敏眞著（単独の著者による他に類がない総合的な人文学入門。）

『人文学の学び方』金子晴勇著（半世紀以上にわたり多くの研究書、教科書と古典の訳業に従事してきた著者が、自由学芸とルネサンスを踏まえたエラスムスによるキリスト教人文主義を紹介しつつ、自分の経験を交えて勉強の仕方、論文や本の書き方、翻訳の方法や学生の指導など具体的に指南する生きた人文学入門。）

『哲学中辞典』（青木書店で企画したロングセラーの辞典の改訂版。初校まで出ていたが中断した。小社で新たに刊行。哲学用語だけでなく思想、歴史、社会、文化など広範な視点で編集された読書人の座右の書。）

『拡大するヨーロッパ世界 1415-1914』玉木俊明著（19世紀イギリス帝国の形成を、交易を中心に長期的、大局的な観点から叙述した初の業績。学界の反響もなく、書評にも取り上げられないが、従来の見方を革新する独自の試みとして、批判も含め問題にすべき作品。学界も通念に囚われず、開かれた知性たらんことを！）

『歴史認識の時空』佐藤正幸著（世界的な歴史理論学会の会長を務めた著者が歴史理論を正面から論じた貴重な業績。欧米では歴史学部があるが、歴史学科しかないわが国の制度的限界が分かる歴史学者必読の文献。）

『「学問の府」の起源 知のネットワークと「大学」の形成』安原義仁、ロイ・ロウ著（12世紀のヨーロッパの大学の起源の以前、古代以来人類の知識と知恵はどのように形成され伝播したのか。未だ組織的に問われてこなかったこの問いに、日英を代表する大学史研究者が共同で挑んだ画期的な著作である。英語版と日本語版が同時に刊行された。グローバル化するこれからの学問にとって、文字通りの「温故知新」である。）

『動学的パネルデータ分析』山本拓他著（わが国の計量経済学で遅れていたパネルデータの分析について、本格的にその分析の計量的手法と意味を解説し、さらに高度な分析手法も展開した他に類書のない基本文献。）

『非協力ゲーム理論』グレーバ香子著（協力ゲームに関する書物は多数刊行されているが、分析が高度になる非協力ゲーム理論の分野では限られている。本書はその中で的確な解説と豊富な事例で定評の教科書。）

『確率解析』楠岡成雄著（金融理論やダイナミックな分析に活用され、注目を集める本書の分析手法は、著者が長年にわたり東京大学で講じてきた講義案をまとめた待望の教科書である。）

『北朝鮮経済史 1910-60』木村光彦著（戦前から戦後にかけて北朝鮮経済の実態を、多彩な資料を活用して解明した画期的な通史である。イデオロギーを排し資料に基づく著者の北朝鮮経済研究の到達点。）

## II 今後の方向と未来

### \* 研究環境の劣化と学術産出力の減衰

- ・ 少子化に伴う大学経営の困難（過去10年以上に渡り、少子化の予測にも拘らず大学設置申請の増加現象）。
- ・ 文部科学省による大学管理の徹底化。いわゆる文科省統制の日常化（入学者定員の統制、教員の定員規制、独法化した大学への補助金による影響力の強化など、様々な指示と通達）。

- ・研究者にとっての教育と公務の加重負担と研究時間の制約。
- ・研究費の削減と科研費による研究費再配分システムの強化。
- ・業績主義の強化と研究密度の希薄化，テーマの矮小化（タコ壺）による人文系を中心に研究業績の低迷。
- ・一線の研究者の業績低下による本格的な専門書の減少と一般啓蒙書の繁栄。四五十代の第一線で活躍している研究者が，時間の制約もあり本格的なモノグラフが書けなくなっている。それに代わり研究意欲の旺盛な研究者と名誉教授の業績が伸びる傾向がある。ノーベル賞を受賞した日本人研究者が異口同音に，将来はノーベル賞授賞者が出ないだろうという警告と平仄を合わせている。
- ・大学院生の減少（特に博士課程）と就職難，海外への留学生の減少
- ・共同研究の進展，科研による総合研究の推進が，研究者本来の研究課題に集中するエネルギーを削いでいる。
- ・授業形態が通年からセメスター制に変わってきたことにより，講義の内容も分節化され，全体の構想をまとめる機会が少なくなってきた。本格的な概説書や通史が書きづらい環境が強まっている。
- ・コロナにより大学の授業形態が変わり，新たな試行錯誤で展開するものと失うものが何かを判断することが肝要。とりわけ対話性を基盤とする人文学が，情報と知識偏重の傾向にどう対応するかが問題となろう。

#### \* 知泉書館の企画方針

- ・大学院教育の重視と知識社会の深化：（《知泉学術叢書》は一次文献と基本文献の翻訳，わが国の優れた概説書）。
- ・ヨーロッパおよび他の文化圏への接近とグランドセオリーの発信（国民文化から世界的課題と文化への貢献）。
- ・近代の思想研究は理性と感性を軸に展開してきた。伝統的なヨーロッパ思想では霊性を中心になって機能していたが，宗教離れの今日，霊性と正面から向き合う研究者は少ない。

これは宗教の世俗化として中世的な信仰世界が転換してきた帰結と言える。本来の世俗化は修道院やキリスト教会の財産を開放し，信仰を新たな時代の国民や民衆に開かれたものにするのであった。その例がウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であろう。神の啓示が職業の意味になり，労働は神から与えられた天命であり，人はそれを日々の生活の糧にし，生きがいにもするという，社会的な観念形式であるモラルとして定着していった。これがヨーロッパ近代を考える基礎的な前提である。

今日，ネット社会になり多くの人びとと繋がるとともに，孤立して尖った個人主義も目立つようになった。引きこもりやうつ病，あるいは社会的病理現象としての犯罪が横行しているのを見るにつけ，理性と感性だけでなく，人間のもっとも深い魂の場で機能している霊性を無視し続けるのは，人間の傲慢ではないのか。このような状況のなか宗派をこえて良質な作品を提供したいと思う。

- ・史料集の刊行。ヨーロッパモデル（ヨーロッパの自画像）の克服のために，原史料から独自の解釈の可能性を探求し，異文化研究の意義と貢献を再確認する。
- ・東の中国圏と西の西洋圏を中心とした学問的関心から，汎ユーラシヤ的な視点からの研究展開を目指す：『「学問の府」の起源 知のネットワークと「大学」の形成』が描く，高度の学問知と技術の伝播を再考する。
- ・東洋学，西洋学，インド学，メソポタミア学，イスラム学など伝統社会に蓄積されてきた知の遺産を，グローバル時代の流れのなかで総合的に考察する視点の開発。
- ・情報化の波に洗われている現実に対して，学術研究書の新たな使命を探求する。時間的・空間的にも射程の伸びる研究，柔軟な知性と広く深い学問的営為に支えられた学問の可能性を追求する。

## \* 出版社としての課題

- 販売価値より出版価値を第一義とし、しかる後に総合的判断を構成する。
- 創業期は創文社での経験をもとに初版部数 800 部でスタートしたが半分も売れない現実に直面。その後、初版部数を減らしていき、半分以下のケースも出始めている。市場の問題か、出版社、作品の問題か悩ましい。  
創業以来 6 万部ほど廃棄した。現在も大量の廃棄を進めている。多くの刊行物の販売不振が定常化するなかで、在庫圧力により圧死寸前である。年間の制作数と販売数を均衡させるのが理想であり目標である。
- 小社ではリスクを 100% 負担することを旨に経営してきたが、現状の初版部数の設定では定価がつけられない。この状況にどう対応するかが最大の課題である。部数を増やして定価を下げ、在庫が増えて廃棄し環境に負荷をかける、まさに近代産業社会の縮図のような現実を克服すること、私たちの避けられない問題である。
- 著者には科研費の補助や大学の補助申請をお願いしている。
- 小社では、学術書として 50 年後、100 年後でも読んでもらえる本作りをコンセプトとしている。そのため糸かがりの上製本で、布表紙を使用している。これは並製本に比べ非常にコストがかかるが、可能な限り維持したいと思っている。電子化すれば必要ないとの意見も多い。著者も含めこのような本作りは、残念だがほとんど評価されていないように思える。愛書家が少なくなってしまった。
- 小社の営業上の問題点は、通常は教科書や定番商品で収益を確保し、採算が取れない学術出版活動を維持するのが伝統的なビジネスモデルである。しかし小社では教科書もほとんどなく、重版したのも数点である。これは小社の企画力の弱さと後発の出版社という二つの要因が働いているように思える。  
さらに近年、教科書の売れ行きは一般的に言っても減少している。その理由を想像するに、授業でセメスター制が増え、本格的な教科書需要が減り、また学生も経済的に厳しくなり高いテキストは買わないため、新書や文庫など廉価な本が採用されていること。それに教材を大学のデータベースに集約する試みがはじまり、既存の教科書が侵食されていること。さらに情報化に伴い、書物への需要が構造的に転換し始めたことも考えられる。以上のように、後発参入組の出版社が教科書市場の転換とかつての実りを手にできないことが、小社が抱える基本的な問題のように思える。
- 学術出版社の基本戦略はブランド化が必須条件である。そのためには、他社では出していない、あるいは出せない独自の企画が必要である。されにその上で長期間にわたり需要が維持できる商品群であること。この二つの条件を満たすには長期間の出版活動、長い懐妊期間が必要である。しかしその現実に耐えていくのは非常に困難であり、成功の確率は極めて低い。これは出版社の究極の選択行動と言えるものであろう。
- 刊行点数が 400 点ほどになり、県立図書館での購入など多少の変化が出てきたことと、直販の読者が漸増していることが微かな希望である。ただ直販はアマゾンで売られていないことがあり単純には喜べないが。  
将来的に危惧しているのは、近年大学での購入が著しく減少していることである。大規模な大学では、研究室や研究者個人も含め 10 冊以上購入されていたと思えるが、最近では情報管理が行き届き、図書館にすでに入っている書籍の購入が制限され極端に減っている。これは大学の財政緊縮と研究者の研究費減額、さらに図書費用が情報機器関連に流れているためと思われる。また研究費を科研費で取得することも影響を与えている。
- 戦後の出版界の隆盛期を経験した者としては、当時の販売額の半分以下にまで衰退し、書物から情報への転換という変化にも直面、過去を懐かしむだけでは打開する道はない。それは明治前期に、版木で出版していた江戸時代以来の業者が、活版印刷本の展開で一挙に廃業に追い込まれた時代を髣髴させる。今後は複製技術の進化にともない、オリジナルの創造的、源泉的営みが最後の拠点になると思われる。そのためには企画

力と編集力を強化して、変化への適応力を鍛える以外にないと思える。出版人の真価が問われている。

### Ⅲ 私の創文社時代（1969-2000）

創文社は2017年に刊行を停止し、1951年（昭和26年）以来66年に及ぶ出版活動に幕を下ろしました。寂しいことですが、これが世の流れということでしょうか。

私もそこに関わってきたものとして、この会社への感謝と思い出の一端なりとも記しておきたいと思います。

はじめに忘れてはならない方として、まず鈴木成高<sup>しげたか</sup>先生について語らねばなりません。先生は戦前に京都大学の西田幾多郎門下の俊英として、メディアでも活躍し言論界に大きな影響を与えました。戦後はそのためにパージをうけ公職を追放されました。先生は京都大学を退官し野に下り、早稲田大学で教鞭をとりつつ世にはいっさい出ないで矜持を守り通しました。その先生が力を注いでくれたのが、顧問として学術出版社創文社を縁の下で支えつづけたことでした。創文社が世間で認められるためには、先生の存在なしには語れません。周囲の心ある学者たちも先生の依頼に積極的に協力し、創業期の創文社で多くの企画が実現しました。また戦後の冷戦下、厳しいイデオロギー対立が学界にも強い影響力を持つなかで、創文社が党派に偏せずヨーロッパの正統な学問を踏まえて活動できたのは、先生の高い見識なしでは考えられません。先生の前半生は世の華やかなライトを浴びて過ごされ、後半生は世に隠れ、文字通り「一隅を照らし」続けたのです。先生は話術が巧みで、私たち編集者もお話を聞くのが楽しみでした。先生が「出版社の価値は目録の中にすべてあるものだよ」という言葉は、私にとって耳底に残り今でも導きの糸になっています。先生、有り難うございました。合掌。

創文社は社長の久保井理津男さんと編集長の<sup>おおほら</sup>大洞正典さんが両輪になって営まれてきました。

久保井さんは苦勞人で不屈の精神をもって社を支えてきました。非常に真面目で、強い生き方をもった個性的な人です。そのため多くの学者から信頼されました。ただその強烈な個性のためか人間関係は必ずしも広くなかったように思います。そのような彼を支えた奥様の内助の功は非常に大きく、何よりの協力者だったと思います。

久保井さんは、弘文堂で活躍していた石井良助（日本法制史）、岡義武（ヨーロッパ政治史）、団藤重光（刑法学）など諸先生の著作を引き継ぎ、創文社の基盤を作りました。特に石井先生らを中心に設立された「法制史学会」の事務局を引き受けたことにより、学会誌『法制史研究』などその後の法制史関係の出版活動を担うことになりました。『徳川禁令考』『藩法集』などの史料集をはじめ、日本、西洋、東洋にわたる広範な法制史分野の業績を展開したのは、地味ながら出版社としての創文社の骨格を作るうえで貴重な業績であり、学界への貢献も大きかったと思います。

大洞さんは戦前に早稲田大学の学生（英文学？）時代、東京の弘文堂でアルバイトをしており、その縁で社員になったようです。その頃の弘文堂には後に文壇で活躍する富士正晴や橋川文三がいたそうです。彼は四国は宇和島の旧家の出身で、その穏やかな人柄と名前の面白さから、多くの先生方に愛されました。知人にも恵まれ同郷の人々をはじめ豊かな人間関係のなかで生きていたように思われます。彼は山の雑誌『アルプ』を主催した串田孫一さんとも親しい間柄で、串田さんも心を許していました。この人は押し出すタイプではなく、人に寄り添い、その気持ちを受けとめながら伴走する<sup>まご</sup>風で、多くの学者だけでなく芸術家にも愛されました。忘れられないエピソードがあります。辻一さん（辻潤と伊藤野枝の子息）が『アルプ』の講演会で、彼のことを「小さく叩けば小さく響き、大きく叩いても小さく響く人だ」とユーモアを湛えながら語ったのが昨日のように思い出されます。辻さんも大洞さんが好きでした。

大洞さんは、京都大学の人文系を中心に哲学、東洋学、経済学など幅広い人脈に支えられ



多彩な活動をしました。哲学は西田門下の西谷啓治、高坂正顕、高山岩男をはじめ、下村寅太郎、鈴木成高先生とその後継者の方々を中心に活動しました。後年〈西谷啓治著作集〉や〈ハイデッガー全集〉に結実します。

戦後、京都大学文学部の改組により、古代哲学と中世哲学の講座が新設され、古代は田中美知太郎、中世は高田三郎が担当しました。高田先生が演習で〈神学大全〉を使用し、その訳をお弟子さんたちが作り、高田先生が監訳するという企画が進行しました。先生没後は山田晶、稲垣良典先生らが引き継ぎ完成させました、半世紀以上に及ぶ事業です。この企画が機縁になり、遅れていた中世哲学研究に光が当てられ、多くの研究者による関連書籍が刊行され、中世哲学会の機関紙『中世思想研究』の刊行にも関わって、この分野の中心的な出版社となりました。

東洋学は、戦前の京都の中国研究の成果を世に問うことを目的に企画され、1971年に刊行が始まった〈東洋学叢書〉を中心に展開しました。当時の中国研究において世界のトップランナーであったわが国の研究成果が陸続として刊行され、海外に行った先生方が、モスクワ大学でも、オックスフォード、パリ、ハーバードなど主要な海外の大学図書館でこの叢書を目にしたという話をお聞きしたものです。文化大革命以降、中国から多くの研究者がアメリカを中心に海外に進出しました。近年、彼らのお弟子や孫弟子たちが世界で活躍しているのを聞くにつけ、わが国の中国研究にかつての熱気が感じられないのは寂しいことです。

経済学では高田保馬門下の青山秀夫、森嶋通夫、市村真一など、戦後の近代経済学の草分け的な業績を刊行しました。当時はマルクス経済学が盛況で、近代経済学は俗流経済学などと揶揄されていた時代です。わが国の経済学研究も戦後のアメリカ経済学の影響をうけ、アメリカで Ph.D を取って活躍する人が増えました。創文社の〈現代経済学叢書〉は新しい経済学の教科書として広く使われ、後年研究者になった多くの先生方からこのシリーズで勉強したとよく聞かされました。また森嶋通夫先生が発案した〈数量経済学叢書〉では、ミクロ、マクロ、計量というアメリカ経済学のシステムを踏まえた広角的な視点で展開された研究成果が輩出して、日経経済図書文化賞の常連となりました。当時このような発想は日本ではありませんでした。さすが世界の森嶋だと思ったことです。

このような学術出版活動のなかで、オアシスともなったのが雑誌『アルプ』でした。詩人の尾崎喜八、哲学者の串田孫一両氏の主催のもと、地味ながら独自の山と文学の世界を展開しました。この雑誌には紙面を汚さないために広告を一切掲載しませんでした。この雑誌は限られてはいましたが、山と芸術を愛する読者に深く静かに浸透したと思います。終刊を迎えた時には、それぞれの人生の中でこの雑誌がいかに大切でかけがえのないものであったかという声がたくさん届きました。

この雑誌を通して多くの作品が生み出されました。尾崎喜八詩文集をはじめ串田孫一さんの随筆集、山の版画家畦地梅太郎さんの独得の風貌を持った山男の姿は、今でも多くの人を惹きつけています。辻一さんの自然や生き物と平仄を合わせて人間が感受する世界の素晴らしさを描いた『山で一泊』、山口躍久さんの名著『北八ツ彷徨』、結城信一さんの珠玉の名品『鶴の書』、庄野英二さんの『ユングフラウの月』、そして中央公論社の編集者近藤信行さんの『小島烏水』など、写真家や画家、彫刻家、随筆家、文学者、学者、編集者にいたる多彩な人材が、この舞台で飾らない姿を披露してくれました。山や自然を結び目に多くの人びとが集ったこの雑誌の軌跡は、一足先に自然環境の大切さを示唆してくれました。

私はこの久保井・大洞という二人のリーダーの下で、それぞれの良き役割と人間性から多くを学びました。

そしてもう一人決して忘れることのできない方がいます。それは校正を見てくれた関根敏さんです。

このひとは、京大の波多野精一さんのお弟子です。大学を出た時に昭和恐慌に遭遇し、就職難の時代でした。学生結婚をして苦勞していた折、「校正係ヲ求ム」という貼り紙を見て京都の弘文堂本社に入りました。世故には疎く典型的な研究者肌の人でしたが、その後

戦争に突入し社員が徴兵されていくなか、最後には責任者にもなったようです。その方が戦後、創文社の校正を支えてくれました。私が入社した頃は自宅で校正し、終わると出社してこれ次第に仲良くなりました。戦前の京都大学を中心とした先生方の逸話や学問の話、その頃の出版活動の話を知りました。晩年には奥様を亡くされて、鶴沼海岸の文字通りあばら家で一人暮らしをしていました。年に二度ほど一升瓶を抱えて、妻が作ったつまみを持参し、昔話や最近読んだ校正などについてよま話をして、至福の時をすごしたものです。この人は校正の疑問は辞書だけをたよりに検討していました。ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語、漢語、そして近代語の英仏独と日本語の辞書だけで日がな校正をしていました。偉い先生の彼への礼状を預かったものですが、「関根様」というあて名がいつの頃からか「関根先生」に変わっていました。またある時、関根さんが見た校正を著者と向き合って検討していました。そのうち先生が青ざめて冷や汗をかき始めます。その時ほど、「言葉の怖さ」を感じたことはありません。関根さんの両指は内側に弧のように変形していました。それは何十年も辞書を両指でめくっているうちに変形したとのこと。この人は校正の神さまだと敬服しました。その頃岩波書店の校正者と話したことがあります。一日一綴りの16頁以上は読まない、資料室や図書館でいろいろな資料に当り校正していると誇らしげに語っていたのが印象的です。高い給料と恵まれた環境で校正する人、あばら家で清貧のなか校正をする人、世の中はいろいろだと思ったものです。これ以外にも多くの先輩や同僚、後輩が皆で創文社を支えてきたことが、走馬灯のように思い出されます。出版社は多くの人々の努力に支えられている文化産業であることを、今さらながら誇りに思います。そこに関わった多くの人たちはすでに鬼籍に入りましたが、残された者としてその誇りを胸に、良い仕事をしたいと願っています。

#### \* 創文社について

- ・ 創立の経緯：1951年（昭和26年、ちなみに東京大学出版会も同年創立）に弘文堂から独立（「西の弘文堂」と「東の岩波」と言われた）。同時期に西谷さんの未来社、酒井書店、清水弘文堂など5社が独立。
- ・ 出版社の性格：元京都大学教授、鈴木成高先生（早稲田大学教授）を顧問として迎える。東大法学部系の教授による教科書を弘文堂から移すことにより、大型の教科書群を基盤に起業。鈴木先生が中心となり、当代の一流の執筆陣による講座や辞典の刊行（現代史講座、倫理学講座、現代史事典、倫理学事典）。京都大学系の研究者の学術研究書を中心に刊行、東大、東北大、九州大、大阪大学などの研究者へ展開。
- ・ 出版分野：哲学、歴史学、文学、法律学、法制史、経済学、東洋学、教育学、月刊誌『アルプ』

#### 《翻訳書の刊行》

- 〈名著翻訳叢書〉（中世の秋、ヨーロッパ世界の誕生、ヨーロッパの形成、12世紀ルネサンス、フランス農村史の基本性格、イギリス荘園の成立、国家の神話、17世紀の思想的風土、精神の発見、儒教と道教、憲法理論）
- 〈キリスト教古典叢書〉（全16冊）（聖アウグスティヌスの生涯、カトリック教会の道徳、秘跡、教えの手ほどき、キリストの神秘、偉大なる忍耐・書簡抄、祈りについて・殉教の勧め、聖霊論）
- 〈トマス・アキナス「神学大全」〉（全45冊）
- 〈ドイツ神秘主義叢書〉（神性の流れる光、ドイツ語説教集、エックハルト論述集、タウラー説教集、ゾイゼの生涯、非他なるもの、アウローラ、ペーメ小論集、ドイツ神学、キリスト教についての対話）
- 〈マックス・ウェーバー「経済と社会」〉（支配の社会学、都市の類型学、法社会学、宗教社会学、音楽社会学）
- 〈歴史学叢書〉（法史学の存在価値、ローマ帝国の没落、古ゲルマンの社会組織、古代から中世へ、中世都市、中世の法と国制、中世異端史、叙任権闘争、近代の終末、近代英国、転換期の国家と社会）

〈ハイデッガー全集〉(全102巻)(初期論文集, 杣徑, ニーチェ, 道標, 言葉への途上, 真理の本質について)

#### 《叢書関連》

- 〈藩法集〉(全12巻, 15冊)(幕府法に対して独自の法令整備をした主要な外様大藩を中心にした史料集成)
- 〈徳川禁令考〉(全11冊)(幕府の主要な法令, 裁判例, 仕置令を分類編集した法制史料の一大宝庫)
- 〈問答集〉(全12巻)(江戸時代に多数存在する問答集から厳選して編集。三奉行問答, 三秘集・公裁集)
- 〈東洋学叢書〉(世界をリードした学界の研究叢書。古代中国の神々, 春秋公羊伝の研究, 初期の道教, 六朝道教史研究, 明代思想研究, 中国語学研究, 杜甫の研究)
- 〈中国学芸叢書〉(中国の学芸を身近なものにした叢書。中国の歴史思想, 中国人の宗教意識, 中国の科学思想, 宋学の形成と展開, 明清の戯曲, 中国文学と日本)
- 〈東南アジア研究叢書〉(京都大学の研究センターの叢書。東南アジアの人口, 上座部仏教の政治経済学, 東南アジアの熱帯雨林世界, 東南アジアの人口, 熱帯デルタの農業発展, インドネシアの米, ドンデーン村)
- 〈身体思想〉(日本人の思想の基層部分に光を当てる。身体, 悪, 気質の話, 戦前・家の思想)
- 〈現代経済学叢書〉(定評の教科書シリーズ。資本主義経済の変動理論, 国際貿易と経済発展, 経済の成長と循環, 国民所得理論, 現代財政学)
- 〈数量経済学叢書〉(日本の先端的研究を展開した叢書。経済発展のメカニズム, 一般均衡と価格, 財政支出の経済分析, 日本農業の発展過程, 寡占の理論)
- 〈現代経済学選書〉(大学院向けの本格的な中級テキスト。計量経済学の方法, 経済の時系列分析, 現代数理統計学, 国民経済計算, 現代マクロ経済学, 近代日本経済史, 開発経済学, 現代マクロ経済学, 計量経済学の方法, 市場の経済思想, 現代金融論, 福祉社会論)
- 〈現代自由学芸叢書〉(最先端の社会科学的業績を展開した試み。自己組織性, 共生の作法, 権利と人格, 都市と権力, 自由の論法, 現代倫理学の冒険, 制度論の構図, 市場経済の哲学, 新社会哲学宣言)
- 〈個人全集〉(西谷啓治著作集, 山田晶中世哲学研究, オッカム「大論理学」註解, 柳田謙十郎著作集, 浅野順一著作集, 石井良助法制史論集, 島田正郎東洋法史論集, 宮田光雄思想史論集, 広中俊雄著作集, 高橋誠一郎経済学史著作集, 青山秀夫著作集)
- 〈フォルミカ選書〉(戦後の知への息吹を感じる叢書。民族の歴史的自覚, 詩とデカダンス, 作家の青春, 愛の彷徨, 哲学論, 蟻の歌, 危機の本質)
- 〈アルプ合本〉(全5巻), 〈アルプ特集選〉(全8巻)

#### \* 私の創文社での活動

- ・入社後1年半は研修, 見習いで過ごす。
- ・PR誌『創文』を担当し, 編集業務の基本の作法を身に着ける。
- ・文部省科学研究費刊行補助の申請業務を担当する。文部省直轄で, 霞が関の文部省へ頻繁に出向く。
- ・担当分野: 経済学, 哲学, 宗教学, 東洋学, 歴史学, 教育学(〈神学大全〉, 〈東洋学叢書〉, 〈数理経済学叢書〉, 〈高橋誠一郎経済学史著作集〉)
- ・大型企画では〈現代経済学選書〉と〈中国学芸叢書〉を展開した。単行書は中世哲学, 哲学, キリスト教学, 経済学, 東洋学を主として幅広く担当する。
- ・著者との出会い: 山田晶, 加藤信朗, 稲垣良典, 金子晴勇, 近藤恒一, 小川環樹, 本田濟, 戸川芳郎, 増田四郎, 熊谷尚夫, 森嶋通夫, 斎藤光男, 荒憲二郎, 根岸隆, 福岡正夫, 山崎昭, 吉川洋, 串田孫一, 辻一……。今の私があるのは, これらの先生を中心に, 何もわからない若者をここまで導いていただいたお陰です。

- ・ 2000年に55歳で定年退職（退職後仕掛かりの本があり10カ月ほど勤務）、在職31年間で320点ほどの刊行に関わった。多くの楽しい仲間たちと優れた著者や作品に囲まれて、恵まれた編集人生でした。
- ・ 編集活動の問題点：多くの訳書を出したが、多くが古典的なものを中心に翻訳権対象にならなかったものである。創文社は翻訳権の取得を避ける傾向があり、海外の新しい著作に接する機会が少なかった。それが将来的な展開を弱めた。ホイジンガーやマルク・ブロック、ピレンヌなどの重要な訳書を出したにも拘らず、その後のアナルなどの潮流に乗れなかった。ただ例外は経済学関連の教科書などは翻訳権を取って刊行し、中にはスタンダードな教科書としてロングセラーになったものもある。  
ここで働いた者として感じるのは、組織としての戦略的な活動が弱かったことが、人材の養成も含めて継続的な展開を阻害したように思える。人材育成を軸に組織とガバナンスが機能的に運用されるのが、出版社にとり肝要なことである。しかし多数の中小零細企業の集団である出版産業にとって困難なのは、多品種少量生産をベースにする出版社が数人規模でしか経営できない事実、反面、会社など組織として発展させることにより、経営優先の利益重視型の経営になりがちであるという事実、このように単なる組織論では解決できないアンビバレントな問題を抱えていることである。その狭間で絞り出されるように、優秀な出版人による「一人出版社」が活躍しているように思える。しかし後世に伝えていくという持続性を考えるとそれで問題が解決するとは思えない。伝承とは最終的には人間の営みなのである。深刻な問いである。

#### IV 編集と出版の現状と今後

##### \* 編集活動と人材養成

- ・ 明晰で論理的な言語の操作 学術書に関わる者として、明晰で論理的な言語感覚を磨くことは大切である。フェイクやトリッキーな言葉に眩惑されないためにも、その罠に嵌まらないよう訓練したいものである。
- ・ 歴史意識の涵養 激しい情報化の波に曝され、スピード化が常態になるなか、長期的な視点で学界や時代の変化に向き合うことが必要である。困難は増すばかりだが、時代意識、歴史意識を深めるように努めたい。
- ・ 全方位的知識と公共性の重視 グローバル化、情報化、スピード化のなかで、自己の立ち位置を確かめつつ、自分の枠を超えて公共性という社会的な信頼へ繋げていく努力がメディア人としての責務と思われる。個人化、タコ壺化など内閉化現象の反面、開かれていく世界にどう対応するべきなのだろうか。  
そのためには個人的な好みに囚われず、多様なメディアを活用し情報収集力を強化し、自己の視点から分析する能力を高めることが必要である。現象や経験を分析し、構想する力は編集の基礎的能力である。
- ・ 校正業務の重視 多大なコストを伴う校正は、アメリカやヨーロッパでは著者責任のもとで、出版社で校正しないケースが増えている。わが国でもその動きが出始めており、5,6年後には多くの出版社が同様な対応をすることになる。  
ただ学術出版社としては、専門書の校正は難しいが新たな知への扉であり、それは先端的なものとの出会いである。創発的な企画を展開するうえで、この経験は貴重である。編集者は自己の知性を磨いていく気概がなければ、将来にわたり学術書を担っていくのは難しいであろう。
- ・ カバー広告の作成 小社では刊行物のカバーの裏側に500字ほどの広告文を挿入している。これは担当者による編集作業の最後の仕上げであるとともに、この書物とどのように向き合ってきたかを示すものである。また作品と読者をどのように接続するか、媒介者としての編集者の力量が試されることになる。この緊張が入稿から責了にいたる一連の編集業務に良い影響を与えることが期待される。

- ・ 業務の合理化と省力化 出版経営が厳しくなる中、業務の洗い直しは常になされねばならない。限られた時間と予算の制約のなかで、入稿から刊行までのシナリオを描きながら調整しつつ質の高い仕事を実現するには、ムダを省き、コスト軽減を図る必要がある。とくに期限を決めてその範囲で実現する習慣づけが重要である。生産性の向上は、今や出版社のみならず国民的課題であるが。

小社では情報化という流れの中で、組版プロセスの合理化、編集業務の省力化と高度化、情報資源の活用など、零細出版社として最大限の努力により、出版業全体が衰退する中でいかに延命するかを模索している。

他方、日本の出版流通は時代の変化に対応する術が見出せず、深刻な事態に陥っている。未だに注文から1週間、10日もかかるという、書店一取次一出版社の浮世離れた流通システムを改善できない。アマゾンをはじめここ20年に及ぶ流通革命を考えるべきである。

話は逸れるがこれは出版流通だけの問題ではない。冷戦終結後30年、情報化とグローバル化の中、わが国の経済社会だけでなく、政官民の全体が抱える問題で、すでに世界から周回回りで遅れているのが現実である。問題の根は、情報システム自体にあるより、情報化を受け入れるべき現場が、それを受け入れられるように業務を再編できないことにある。この不適合は、お金やシステムではなく人々の観念をモードチェンジすることによって解決するほかないのである。慣習や慣行に寄りかかる日本人の依存体質、依存症を直すという、一大革新が必要である。

#### \* 企画について

- ・ 企画には二つの分野がある。一つはマーケットの動きに合わせて企画する。もう一つは学界の動向と状況に合わせた企画である。それぞれ時間的にも経済的にもまったく違った性格を持つ。
  - ・ 前者は広い読者層を対象とする。時代の流行と潮流、さらに人々の関心の動きを観察しつつ、読者が未だ自覚していない潜在的な関心に光を当て、新たな気づきや驚きを喚起するなど、現実への深い観察と直観を通して企画の種を見出し、形式化することになる。
  - ・ 後者は専門分野の企画である。この分野の特徴は著作自体が10年、20年と長期に及ぶことである。研究状況を把握し、社会の構造的な変化や学界や歴史的な動向を見ながら、その研究が今後数十年の射程のなかでどのように位置づけられるかがポイントである。この種の企画は地味な校正作業を通して着想が芽生えることが多い。そして重要なことは優れた研究者との対話である。そこには国際場裏で活躍している広く深い知識と知性、そして洞察力をそなえた見識ある人材がおり、そのような人々から得るものは大きい。その際には編集者がインタビュアーとして、研究者からどれだけのものが引き出せるかが問われる。「問いが分かれば、答えは半ば分かったも同然」といわれるように、優れた問いかけこそ、編集者の真骨頂である。
- この方面の企画で注意すべきことがある。それは事実を一つひとつ積み上げていくような研究で、それ自体には創発性も高くなく、市場性もないが、ただ学問のインフラ的機能をはたし、多くの研究者が当然のようにその業績を活用するような仕事の存在である。この種のものも学術書としては大切にしなければならない。例としては資料集の編纂、全集の批判的校訂、古くは東洋学の伝統で索引作りなど、縁の下を支えるような地味な仕事である。学問もまたこれらの無名な研究者の努力によって営まれていることを忘れてはならない。
- ・ 一般書では、編集者独自の視点とマーケットとの対話を通して、より多くの読者を獲得することが主眼となる。研究書では、著者の研究事情に即してその完成度を見ながら具体化する。上で触れたように学界や海外の動向も踏まえながら、本書の位置づけと意義を見定めることが必要である。出版界の主流は前者の一般読者向け企画であり、専門書は少数派である。しかしこれら両者は互いに補完し合いながら機能している。

以前は処女作の研究書を出してから 10 年くらいすると新書などで啓蒙的な作品を刊行したものである。今日はライターが広域的になりそれほど簡単ではないが。

## \* 出版社と出版の将来

### [電子書籍と書物]

- ・読書習慣のある人が世代交代することにより書物はますます読まれなくなる。たしかに雑誌や書物の電子化は避けられない。そのような趨勢のなかで書物は生き残れるか。合理的な説明が必要である。
- ・両者の長所 情報機器には、膨大なデータへの接近と抜群の検索機能がある。可搬性もよく、文字の拡大縮小などの利便性や世界的な流通環境も抜群である。書物については、可搬性と自在性では情報機器に相対的に劣るが、身体感覚の延長としての親しみやすさと、所有感覚を満たしてくれることは他に代えがたい。
- ・両者の短所 情報機器は、事故や故障のリスクがある。また充電の必要性和、デバイスやソフトの変更に伴う煩わしさがある。また閲覧権のみで、他人への譲渡ができないことが多い。基本的にはヴァーチャル・リアリティとしての、不安定な感覚が付きまとう。記録として長期保存する場合には配慮が必要である。  
書物、とくに大型本は可搬性、利便性が悪い。容積を占める。電子媒体より相対的に高価である。
- ・生理的な影響 パソコン、タブレット、スマホなど透過光による読書は目に負荷をかけ、長時間の使用は失明も含め重大な障害を生む。反射光による読書は目への負担が軽く、長時間に及ぶ読書に適している。
- ・脳への影響 情報機器の使用時に働く脳の部位と書物を読む時に働く脳の部位とに違いがある。情報機器の場合は光を感受する部位である。書物では、人類の発生以来、思考を鍛えてきた脳の部位で適合性が高い。
- ・これらのことから、情報機器と書物の両者は目的に合わせて補完的に活用されるべきであると言えよう。情報機器は、即時性や検索性、利便性や複製・活用性に卓越し、膨大な情報を扱う人やビジネス、エンターテイメントなどで有効であろう。書物は、人間の思考と知恵の特性から、研究、教育や開発、人間に関わる仕事などに有効性があるように思える。今後は情報機器の万能性の中で初めて見えてくる、それでは対応できないことが必ず出てくるはずである。そこに書物の新しい可能性が宿っていると見えよう。事実は小説より奇なりである。

### [電子書籍と書物の競合と補完]

- ・出版社は今後、書物と電子書籍の両面にわたる活動をするようになる。出版社は書物を刊行しつつ、自社本を電子化する。他社で刊行された既刊本などを電子書籍化する専門業者の活動はすでに始まっている。同時に本格的に電子書籍の制作と配信をする専門業者の活躍がいよいよ盛んになるであろう。
- ・両者の制作コストの違い 書物は制作コストも編集コストも高い。電子書籍では制作コストは書物より非常に安い。編集コストの自由度が大きく、低廉な編集も可能である。  
とくに誤植などが発見された時にその特徴が際立つ。書物は再版をまって修正される。電子書籍では誤植や訂正が分かり次第にその都度速やかに修正できる。そのため初期段階の編集コストを削除して、誤りは発見できたときに対応するケースが増えると想定される。ただし著者の対応により異なるが、編集に手間暇をかけずに刊行することが増え、結果として書物と電子書籍の信頼性に違いが生ずると思われる。
- ・個人が電子書籍を発信できる環境になれば、内容にかかわらず膨大な作品群が参入することになる。
- ・電子書籍は情報性とスピードを重視するものを中心に展開し、書物は信頼性と思考や分析を重視するものを中心になると思われる。

### [制作上の版面の違い]

電子書籍は pdf を電子化したものを除き、そのフォーマットが世界標準で規制されている。そのため書籍のような版面上の自由度は限定されている。小説など単純な組版は問題ないが、学術書のように階層構造が複雑なものは、電子出版ではごく簡単な形式に還元して扱わざるを得ない。これは読者の可読性を阻害するもので、このことが書物の独自の存在価値になると思われる。

**\* 文化産業としての出版メディア**

利益追求を旨とする通常の企業活動と違い、出版業は利益追求と同時に文化価値の創造という使命をもつ。この価値は抽象的な意味だけではなく、社会的情報の発掘と流通という民主主義の基盤に関わる機能も果たす。

実際の出版活動は作家と現場の編集者との協働作業を通して作品となる。そこには生態系の多様性と同様に、百花繚乱のように多様な表現が人々や社会に多くの刺激と生気を運ぶことになる。そこにあるのは人々の多様な価値観である。この価値観の多様性こそが、人間や社会に混乱をもたらし、また進歩と革新をもたらすのである。われわれは欲望と価値のなかで人間となっていく、そのドラマを書物は長く伝えてきたし、今後も伝え続けるであろう。

このような社会的価値の実現と利益の享受をどうバランスさせるか、これが出版社の個性に関わっている。他の業界人にも増して、社会における立ち位置を自覚し、それぞれに合った独自の出版活動を目指したいものである。

(2020.9.25)

執筆者について――

小山光夫（こやまみつお） 1945 年生まれ。創文社勤務をへて、2001 年、知泉書館を創業し、代表取締役となる。